

『いつかの傷口に唇をおして』
短編連作演劇シリーズ『メトロポリスプロジェクト』『SHORT CUTS』より
作 じんのひろあき

『135』初演 二千七年十一月。

コンビニの控え室。

だらつとパイプ椅子に貴理子がいる。

やって来る拓弥。

慌てて姿勢を正す貴理子。

めんどくさそうに同じくパイプ椅子に座る。

拓弥「なに、話つて……」

貴理子「えつと、えつとですわね」

拓弥「辞めたいとか言うんじゃないだろうねえ」

貴理子「え？」

拓弥「バイト、辞めたいとかそういうんじゃないんだらうね」

貴理子「え……つと、当たり前です」

拓弥「(つんざりする) おまえもかよ」

貴理子「すいません」

拓弥「ええ……またあ……」

貴理子「すいませーん」

拓弥「理由は？ なに？ まあ、聞いたつてそれで

どうにか、なるもんでもないんでしょう？ 辞め

る意志は固いわけでしょう」

貴理子「すいません……まあ、聞けどさあ」

拓弥「理由は……まあ、聞けどさあ」

貴理子「理由は……嫌になつちやつたつて

どうか」

拓弥「嫌になつちやつたつていうか、で、辞められ

たらさあ、こつちもねえ」

貴理子「嫌になつちやつた……んですよ、

すいません」

拓弥「仕事が？」

貴理子「バイトが……バイトとか、したく

ないんですよ」

拓弥「え？ え？ どういうこと？」

貴理子「だから、バイトするのが嫌になつたんです。

もう、なんつーか働きたくないんですよ」

拓弥「なに言つてんの？」

貴理子「嫌なんですよ、バイト」

拓弥「そりゃ、そうかもしれないけどさあ」

貴理子「拓ちゃんさんは、嫌になりませんか？」

拓弥「嫌に……つて」

貴理子「私、もうダメなんです……」

拓弥「バイトが？」

貴理子「働くことか」

拓弥「え？ どうすんの？ そんな……」

貴理子「どうしましうかね……いや、も

う働くのが……ダメなんですよ」

拓弥「ダメつて……」

貴理子「働きたくないんです」

拓弥「働かないと食えないだろう」

貴理子「もう……ねえ……いいで

しよう、私は充分がんばりましたよ」

拓弥「なんだよ、それ」

貴理子「ね、がんばつたですよ、がんばりました

よねえ」

拓弥「いや……あ、あのねえ」

貴理子「がんばつたと思うんですよ」

拓弥「いや……んとねえ、なにから話そ

かね」

貴理子「なにからでも」

拓弥「うん」

拓弥「うん……そうだね……キリちゃんがんばつたかどう

かつてところね、まず」

貴理子「はい」

拓弥「がんばつたかどうか……も、こつち

としては、分からないくらい、あつという間に、

辞めちゃうとか言い出したつて感じなのよ、正直

ね……正直なところよ」

貴理子「はい……」

拓弥「もうさあ、辞めちゃうんですよ」

貴理子「すいません」

拓弥「もう、僕がここでなに言つても辞めちゃうわ

けだからさあ……もうここにいる一人の

ね、二十八歳のいちフリーターが言っていること

だと思つて聞いてもらいたいんだけどさあ」

貴理子「はい」

拓弥「どうなのよ、それは……」

貴理子「はい？」

拓弥「もう働きたくないつて……僕はね、

このバイトを十八からやつてるからもう十年ね、

ずつとこつこつやつてきて、僕がこの店に入つて

きてさ、この前数えたり、僕の後から入つてきて、

僕よりも先に辞めていったバイトは百三十四人の

のね」

貴理子「……はい」

拓弥「多いよね、百三十四人つていうのはさあ」

貴理子「どうやつて数えたんですか？ それ」

拓弥「指折り数えたんだけどね……でも、

そんなに大勢の人の中で、誰一人、もう働きたく

ないつて辞めていった人はいませんよ、ああ、い

ませんでしたとも」

貴理子「私、思うんですよ」

拓弥「はい」

貴理子「人はなんで働かなければならないのか？

つて」

拓弥「なんで？ (まじめな顔でデットモして) なん

でだろう？」

貴理子「まじめに聞いてください」

拓弥「大まじめだよ……内心焦つてるくら

いだよ」

貴理子「焦つてる？ なにに？」

拓弥「あなたに、だよ。あなたの存在にだよ」

貴理子「私？ 私はただ辞めていくだけですから」

拓弥「人生最大、最強の敵だね……こんな

ところでボスキャラかよ」

貴理子「すいません」

拓弥「いや、もうそんな、謝まなくていいよ。ボ

スキャラが謝るなよ」

貴理子「あ……いや、そんなにおだてられ

ても」

拓弥「おだててもいいよ」

貴理子「あ……そうですか……」

拓弥「働くのが嫌」

貴理子「ええ……」

拓弥「それはさあ……みんな嫌なんじゃないの？」

貴理子「そうなんですかね」

拓弥「そうなんじゃないの、ホントのところは」

貴理子「だつたら、なんでみんな辞めないんですか？

なんで、みんな黙つて働いてるんですかね」

ねって……あの、私はいないんですけど」
拓弥「うん、君にはいない、僕にはいる……」
・それではない……そっち行っちゃダメ
だぞ拓ちゃん……そうねえ……
例えば、いつからそういつふうに考えるようになったのかね、キリちゃん、なんでそうなってしまったのかね」
貴理子「なんだろう……いつだったかなあ……」
拓弥「こりやダメだっと思ってたのは」
貴理子「こりやダメだ?……あ、あれかな?」
拓弥「なに?」
貴理子「タイムカードを押すじゃないですか……」
拓弥「来た時と帰る時にね」
貴理子「ガシヤって音がするじゃないですか」
拓弥「うん……するよね」
貴理子「こりやって、タイムカード差し込むとガシヤ! ガシヤ! って」
拓弥「うん……来た時間をね、カードに押す音だからね」
貴理子「ガシヤ! ガシヤ! ってね……あの音を聞く度に、ガシヤ! って、私の中になにかが壊れていくっていうか、砕けていくっていうか?」
拓弥「なにが? なにか壊れるの? なにか砕けるの?」
貴理子「なんででしょう……なにかですよ」
拓弥「なにが……壊れるの? なにか砕けるの?」
貴理子「なんだろう……私の中の大事なつたもの……かな」
拓弥「それは……ちなみになんだっただの?」
貴理子「いや、もう、壊れて、砕けちゃったから分りませんけど……あの……分りませんかねえ……こういう気持ち」と、分りたくないっていう気持ち
貴理子「半々……は、なぜ?」
拓弥「分かっちゃうとさ、キリちゃんみたいに、働きたくないやっと思ってっちゃうかもしれないじゃない、ね」
貴理子「いやいや、拓ちゃんさんはほら……私と違うわけですから……」
拓弥「俺はね……ちよつとね、今、話聞いてて、揺らいじゃってるのね、なんかさ……」
貴理子「ガシヤ! ガシヤ! ガシヤ! ガシヤ!」
拓弥「うん」
貴理子「なんで、あの音はあんな音なんですかねえ」
拓弥「タイムカードの音か……うん、言われてみれば、そうなんだよねえ」
貴理子「ガシヤ! ガシヤ! ガシヤ!……」
拓弥「うん……」
貴理子「なにかが壊れるような、砕かれるような、残酷な音ですよええ」
拓弥「働くのが嫌になるよね」

貴理子「そうですね、最初からそう言ってるじゃないですか」
拓弥「タイムカード……タイムカードねえ」
貴理子「もう、この音、聞きたくないなあって、そっだ、やめようって。そうだよって、なんで気付かなかつたんだろうって、バイトって絶対やらなきゃなんないものじゃないって。やんなっちゃうたあ……って。やらないと私、死んじゃうわけでもないしって」
拓弥「いや、死んじゃうって……さつき話したじゃない……ね、食えないと死んじゃうって」
貴理子「バイト辞めてですね……死んじやった人っています?」
拓弥「それは……どうなの?」
貴理子「よく聞くじゃないですか、交通事故で何万人死んだとか、今年は何万人が自殺したとか……でも、バイト辞めて何万人が死にましたとか、発表ないじゃないですか?」
拓弥「ないね……」
貴理子「あれは、なんでないんですか?」
拓弥「……いないからじゃないの?」
貴理子「いない? 私だけ? 私が最初」
拓弥「で、最後かもよ」
貴理子「ほんとですかね」
拓弥「知らんけどね」
貴理子「いろいろお世話になりました」
拓弥「いいのかな、本当にそれでいいのかな」
貴理子「百三十五人目ですかね」
拓弥「え? あ、ああ、そうだよ」
貴理子「記録はどこまで伸びるんですかね」
拓弥「……嫌なこと言うねえ」
貴理子「増えていくんじゃないんですかねえ……私……私みたいな人」
拓弥「私みたいなどんな人?」
貴理子「気付いちやう人」
拓弥「ああ……」
貴理子「なぜ? って……どうして? っ……ガシヤ! って音が……嫌だなあって……ガシヤ! ガシヤ! ガシヤ! ガシヤ! (小さな声になりながら、続けていく……やがて、聞こえなくなる) 間。」
拓弥「……じゃあさあ……今日さあ」
貴理子「はい」
拓弥「タイムカード、押さずに帰りなよ」
貴理子「え? でも……」
拓弥「俺が……押しておくよ」
拓弥「いいよ……」
貴理子「すいません」
拓弥「あの音はさ……」
貴理子「ええ……」
拓弥「嫌だよ……」
貴理子「ええ……」
拓弥「残酷な音だよええ……」
貴理子「ええ……」
暗転していく。

のの「どういうこと？」
二宮「反省してたら、反省文が書けないよ。反省と反省文は切り離して考えなきゃダメだろ。反省してるよって、反省してますって、ののの妹は言ってるけど、そもそもさ、本当は反省なんかしてないでしょ？」
のの「え……うん、まあ」
二宮「どつちかかって言うのと、なんで反省なんかしなきゃいけないんだよとかさあ、もつと言うと、うるせえな、うるせえな、うるせえなあ、面倒くせえなあって思ってるわけでしょう」
のの「ズバリ！ そうだね」
二宮「そんなさあ、反省してないのに、反省してますよ、反省してるんですから、とか言いながら、反省文書いたって、心がこもるわけじゃないじゃん」
のの「じゃあ、どうやったら、心がこもった反省文になるの？」
二宮「心いらないんだよ」
のの「え？ いいの？ そんなんで」
二宮「なんで悪いの？」
のの「えー、でもさあ」
二宮「在学中にどんだけ反省文書こうが、そんなの社会に出たら、フエリス出たお嬢さんって思われるだけなんだから大丈夫だよ」
のの「まあね、それはそうだよ。うちの妹、フエリスなんか行っててもしょうがない、もう学校辞めたいと言ってるからさあ」
二宮「ハカ！ せつかく入ったんだから、出とけよ、学校は！」
のの「でしよう？ でしょ、でしょ、でしょ、でしょ、そうだよ、そうだよ」
二宮「ばっかだな」
のの「だから、そのバカ、バカ言うのやめてってば、うちの妹は頭いいんだよ。あのね、うちの妹が行ってるお嬢さん学校はね、偏差値は意外とっていうか、みんなが思っているお嬢様はバカだっという偏見をぶち壊すくらいに高いんだよ」
二宮「へえ、そうなんだ」
のの「大学は三流って言われてるんだけどね」
二宮「なんで？ その高校から大学に上がる時になにが起こってるの？」
のの「いや、いや、それはいいんだけどね」
二宮「とつとと反省文書いて、すいません、すいませんて言っとけばいいんだよ」
のの「うーん、なんて書けばいいんだろ、私、そもそも反省文なんか書いたことないしなあ」
二宮「だからね、反省文に必要なのはね、まず、自分が出した過ちを再確認」
のの「はい」
二宮「その過ちを何故してしまったのか自分なりの考察ね」
のの「はい」
二宮「その過ちのどこがいけないか誰に迷惑をかけたのか？ あとねえ、その組織にどのような影響があったのか？」
のの「うん、そうだね、そういうの重要だよ」
二宮「メモ取らなくて覚えられるの？」
のの「手にしたスマホを見せて」今、ボイスレコーダーで録音しているから」
二宮「二度手間になると思うけど、ま、いつか。そ

の過ちに対する謝罪と反省」
のの「その過ちに対する謝罪と反省」
二宮「その過ちを繰り返さないことを宣言、なぜ繰り返してはいけないのか自分の考え」
のの「なるほど、なるほど」
二宮「繰り返さない為にこれからどうするのかどのような努力をしてどう行動するのか」
のの「はいはい」
二宮「最後に再び反省。でもって、これを軸に可能な限り最も綺麗な字で書く。私はこのフォーマットでいつも反省文は書いてるね」
のの「え？ 何？ そんなフォーマットはあるの？」
二宮「ネットに調べれば転がってるよ」
のの「反省文の書き方？」
二宮「謝罪文の書き方とか」
のの「そっかあ……みんないろいろ謝ってるんだね」
二宮「今この瞬間もね」
のの「今この瞬間もね、きつと、そうやって……なんていうか成り立っているんだよね、世の中って」
二宮「だから言ってるんじゃない、そうだって」
のの「謝ってるんだね……みんなそうやってあちこちで」
二宮「今この瞬間も頭下げまくってるよ、どこかで、屈辱にまみれながらね」
のの「うわ……」
二宮「仲間はいっぱいいるんだから大丈夫」
のの「それって仲間なのかなあ……全然励ましになっていないよ」
二宮「え、そうかなあ」
のの「痛まない？ 胸が」
二宮「痛まないよ」
のの「痛みがさ……胸の」
二宮「痛まないよ」
のの「ん、でも、やっぱり心の奥底の方でさ、なんで謝らなきゃいけないのか？ って思うし……ただ、謝っていくだけだと、なんていうの(胸の)このへんに溜まっていくものがあるじゃない？」
二宮「そういうね、心の奥底に溜まってく、こう、どす黒いモノってあるじゃない？」
のの「うん、あるある」
二宮「それをね、処理する方法をこの前聞いたんだ」LINEでね自分一人だけのグループを作るの、それで、そこに言いたいことを全部ぶちまけるの、のの「なにそれ、そんなすごいって裏技があるのLINEの使い方の」
趣味は「私の友達にあやめちゃんってのがいてね、木野崎草、あいつねえ、LINEにね、自分一人のグループLINE作ってるらしくて、気に入らないことがあると、全部そこに吐きだしているんだって、もちろん、誰にも見せないけど」
のの「すご！」
二宮「完全、王様の耳はロバの耳の穴だよ」
のの「そだね」
二宮「いろいろやり方はあるってば」
のの「そだね……ああ、なんか今日、みっちゃんに相談してよかったよ」
二宮「いつ死ねって思ったら死ね！ って言って、

すいませんでしたって言って、焼き肉屋に行つて、あー、うめー焼肉、最高！　って、あなたの妹は間違つていないよ、間違つたことをしてないけど、他の人が見たら間違つたことだと思われることなるんだよ。プライドの無駄遣いだよ」

二宮「戦う相手を間違つているよ」

二宮「戦う相手かあ」

二宮「もつとあんだろ本当の戦わなきゃならない敵は、それはさ、ののみが焼き肉屋に連れて行って、上カルビやらなんやらたらふく食わせてやりながら教えてあげればいいんだよ。反省文なんか適当に書いて、これじゃあダメだつて言われたら、また書き直して、そのうち向こうも諦めるから大丈夫だつて、そしたら、焼肉行くんだよ、一緒に、ああ、終わった、終わったつて」

ののみ「焼肉？　今？　焼肉？　焼肉は今、タブーなんじゃないかな？」

二宮「今回の件はさあ、焼き肉屋に罪は無いんだから」

ののみ「まあ、そうだよ、そうだよね」

二宮「これで焼肉屋さんに行くのに腰が引いちゃうつていうか、敬遠しちゃうことの方があなたの妹の人生にとつてもマイナスになると思うよ」

ののみ「確かに・・・」

二宮「ネットウヨつているじゃん、あれだよ、あれが実在するんだよ。目の前に。ネットウヨだらけ、この世の中は」

ののみ「ネットウヨ、実在するのか、目の前にいるのか」

二宮「目の前に現れるネットウヨ、私たちの行く手を遮るネットウヨ」

ののみ「わかる、わかる」

二宮「学校とかみんなそうだよ。そんなの真面目に相手にしてる方がバカじゃん」

ののみ「そうだね、それはそうだよね」

二宮「あなたの妹はね、そのうちもつと大きな壁にぶち当たることになるよ。警察沙汰になるとか」

ののみ「え、そんなの困るよ」

二宮「ばつか野郎！　そんな時にこそこののみ、姉としてのお前の出番だろ、それをなんとかするのが姉の役目だろうが！」

ののみ「警察相手に？」

二宮「警察かもしないし、もつと大きなもんかもしないし」

ののみ「え？　警察？　それはなに？　マフィアとか？」

二宮「マフィアってなんだよ。日本でマフィアってあんの？」

ののみ「え、じゃあ・・・暴力団？　暴力対フェリス？」

二宮「暴力団と警察だつたら警察の方が強くないの？」

ののみ「あー、そうか、じゃあ」

二宮「国家とかさ」

ののみ「国」

二宮「国だよ」

ののみ「国かあ・・・国にうちの妹「死ぬ」つて言うかな」

二宮「言わなくても、戦うことになるよ。国つていうか、そういうなんていうのか、もつと大きなものと戦わなきゃならない時がくるよ、きつと」

ののみ「うわつ、想像もつかないけど、想多ならやりかねない」

二宮「もつとと、謝つちまえばいいんだよ、大丈夫だよ、謝るなんて痛くも痒くもないからさ謝れ、謝れ、謝つちまえばいいんだよ。すいませんでしたごめんさい、悪かつたです。でもつて、頭下げて解決したら焼肉行けよ。謝つた後に、焼肉が待つてると思えば、平気にならない？」

ののみ「警察でも、お国のためでもなく、お肉のために」

二宮「すいません、申し訳ありませんでした。上カルビ」

ののみ「うん」

二宮「本当に悪かつたと思います。黒毛和牛中落ち」

ののみ「うん」

二宮「もう二度といたしません。上カルビ追加」

ののみ「うん」

二宮「今後このようなことがないようにいたします。レバー」

ののみ「うん」

二宮「自分に対する甘さがありました。ミノ」

ののみ「うん」

二宮「迷惑をおかけしました。ネギ牛タン塩」

ののみ「うん」

二宮「信頼される人物になるように心がけます。ユッケ刺し」

ののみ「うん」

二宮「深く反省しております。オイキムチ」

ののみ「うん」

二宮「申し訳ない気持ちでいっばいす。ナムル」

ののみ「うん」

二宮「これからも頑張つて行きたいとおもいます。コムタンスープ」

暗転。

『焼肉へ行こう2　廃墟へ行こう』初演　二十八年九月

ファミレス

あれからそう経っていない日。
テーブルを挟んで二宮咲と佐瀬ののみ。

二宮が怒っている。

二宮「また反省文？」

ののみ「そうなの」

二宮「あなたの妹は、何通反省文を書かされれば気が済むの？」

ののみ「いやもうほんとにこれが最後だから、」

二宮「それが何通目なの？　言ってみ！」

ののみ「十三通目」

二宮「もうそんな、お姉ちゃんの、ののみを頼ることなく、自分で書きなよ。だいたい、これまでいっばい書いているんだからさ」

ののみ「逆だよ、十二通も書いてるからもう書くことがなくなつたつていうか・・・いや、ちがうな」

二宮「なにが違うの？」

ののみ「今回は書くことが死ぬほどあるんだよ・・・」

二宮「死ぬほどある」
ののみ「あ、ダメ」
二宮「なに？」

ののみ「ここで「死ぬほど」とか「死ぬ」っていう言葉を安易使っちゃいけないんだって」

二宮「何？ 何なの？ このドリンクバーおごつてくれるんでしょうね」

ののみ「もちろんもちろん。といっても、私の妹が、だけど」

二宮「で、今回は何をやったの？」

ののみ「・・・それがね、うちの妹が学校帰りに友達と寄り道して・・・」

二宮「また学校帰りに？ 友達と？ 寄り道？」

ののみ「そうなの・・・」

二宮「だから！ あなたの妹が行ってんのはフェリスなんだからね、フェリス女学院。お嬢様学校なんだからね、その自覚をいい加減持ちなよ。いい？ 学校のね、帰りに寄り道しちゃういけないの！

ね、わかる？ そういう校則なの、フェリスなんだから。その校則破ってね、なに？ 友達と焼き肉行つてこの前も反省文を書いたわけでしょう？ なんてまた今回同じように寄り道をして、校則違反して、反省文を書くことになってるの？

あなたの妹は何？ あれなの？」

ののみ「なに？」

二宮「バカなの？」

ののみ「それ、言わないで、かわいい妹なんだから、

ようやく最近仲良くなれたんだから」

二宮「反省文代筆してあげると慕ってくるの？」

ののみ「そうね、そうだね」

二宮「利用されているんだよ、それは」

ののみ「かもしれない」

二宮「わかっているんでしょ、ののみも、それは！

自分で」

ののみ「でも、こういう反省文でしか繋がることのできない姉妹つてのがいるんだよ、わからないでしょ、お父さんの連れ子と一つ屋根の下で四つ下の妹と楽しく暮らさなければならぬ苦労なん

て」

二宮「それは・・・わからない」

ののみ「いいよ、わからなくて」

二宮「で、で、で、なに？ 今回はどうしたの？

どこいったの皆で？ 前回は焼肉行つて怒られた

なら、今回はなに？ フレンチのコース料理でも

行つたの？ あーでも、フェリス行つてるような

奴らは、学校帰りにフレンチのフルコース行つて

も普通か？」

ののみ「どこに行つたと思う？」

二宮「知らねえよ」

ののみ「通学路から見える山の中腹にずっと前から

気になってるホテルがあつたんだって」

二宮「あ！ わかつた！ ホテルの一室貸し切つて

女子会やつたんだろ！ 最近、女子会お勧めのラ

ブ木とかあるんだよ、知ってる？」

ののみ「そのホテルは営業してないんだ」

二宮「え？」

ののみ「もう二十年ぐらい営業してない」

二宮「ひよつとしてそれって・・・廃墟？」

二宮「廃墟？・・・その廃墟のホテルにお嬢様高校の制服を着た女子高生たち三人が学校帰りに」

ののみ「・・・ちよつと入つてみる？ って」

二宮「ちよつと入つてみる？ って入つてみるとこ

じやないでしょ、ホテルの廃墟なんて、あ、じゃ

あ、それでなに？ 近所の人に見つかつたってわ

け？ それで学校にチクられて？ それで反省文

・・・」

ののみ「ちよつと違う・・・近所の人には見つから

なかつた」

二宮「じゃあなんで学校にバレたの？」

ののみ「警察への通報」

二宮「(相当驚いている)えー！ 警察に！ 近所の

人ならまだしも、警察に？ 通報されちゃつた

の？」

ののみ「通報されたんじゃないよ・・・うちの

妹達・・・自分達で警察に電話したの。

今、ホテルの廃墟の中にいるんですが」

二宮「なんで！ あなたの妹！ ほんとにバカなの！」

ののみ「廃墟の中で皆で相談して、それで警察に電

話をしたの。(スマホで電話してる感じで)今、ホ

テルの廃墟にいるんですが・・・」

二宮「バカ」

ののみ「今、ホテルの廃墟の中にいるんですが・

・死体を見つけてしまいました」

二宮「は？」

ののみ「死体を発見してしまいました」

二宮「・・・『スタンドバイミー』かよ」

と、できたら『スタンドバイミー』を掛ける。

ののみ「誰もいないと思つていたあれ放題の二階の

ロビーに、何か気配を感じました。何の音もしな

い静まりかえつたホテルの廃墟の中で、それは突

然、床を這うような低い位置で、けれども猛烈な

勢いで私たちの足元めがけて突進してきたのです

(叫ぶ)きゃー！

二宮「あー！」

ののみ「猫のような、けれども猫ではない、後で知

つたことですがそれは野生のハクビシンで」

と、二宮、ののみの朗読を手で遮つて止め。

二宮「いい！ もういい！ そもそもそれはもう反

省文でもなんでもない！」

ののみ「でも、あつたことを詳しく書いて、それに

ついて反省して書けつて言つたのはみつちゃんだ

よ」

二宮「言つたよ、言つたけど、お嬢様学校の先生に

提出する反省文書いてるんだよ。それが何？ 足

元に勢いよくぶつかつてきたのがハクビシンでっ

て、ハクビシン？ ハクビシンってなに？ 反省

文にハクビシンは必要？ そのハクビシンに対し

て、ののみの妹は何を反省するつてわけ？ 死体

は？ 死体はいつ出てくるの？ 死体、死体、死

体」

ののみ、手にしている原稿用紙の束をパラパラ

とめくつてみる(もちろん、けつこうな枚数がある)

ななみ「まだ、まだまだかな」

二宮「いい？ 私たちは、今、反省文を書いてるん

だからね、わかる？ 反省文だよ、反省文」

「ななみ「逆ギレして」わかっているよ、そんなことは！
言われなくたって！」

二宮「朝怖い」逆ギレしてんじゃねーぞ、ののみい」
ののみ「ごめん」

二宮「そもそも、死体を見つけて、それが三年も行
方不明になつていた男性だったんでしょ？」

ななみ「そうそう」

二宮「御遺族の方からは感謝されているんでしょ
う？」

ののみ「そうそう」

二宮「つていうか、フェリスの学校側に謝る必要は
ほんとにあるの？」

ののみ「一応、迷惑をかけたし」

二宮「どんな迷惑なの？」

ののみ「お嬢様学校の女子高生、ホテルの廃墟で、
行方不明の遺体を発見してつて新聞に載つちやつ
たし」

二宮「発見して、感謝されてるんでしょ？」

ののみ「そうそう」

二宮「何が悪いの？」

ののみ「それはね、だから県立の普通高校の考え方
なわけよ。お嬢様学校は違うの。お嬢様学校なの、
わかる？ お嬢様学校の生徒は帰りにホテルの廃
墟にふらつと立ち寄つて死体を発見しちゃいけない
の、わかる？ 現実にはね、蝶ネクタイした気持
ち悪い大人子供の探偵とかいないんだし」

二宮「ののみ、お前、今世の中のコナンくんのファ
ンを全員敵に回したぞ」

ののみ「そんなつもりはないよ、好きだよ、コナン
くん、時々見るよ」

二宮「え、ののみ、コナンくんとか見るの？」

ののみ「見るけど、時々だし、たいてい、見ると解
決編なんだ」

二宮「いいの、それで」

ののみ「解決編だけ見ても、あれ充分わかるから」

二宮「だから、全国のコナンくんファンをこれ以上
刺激するなよ」

ののみ「死体？ 死体はどこ？」

と、原稿用紙から死体を発見した後の文を見つ
ける。

ののみ「死体は・・・このあたり」

読み始めるののみ。

ののみ「死体の側に立ち尽くした私達。」

「死ぬと・・・こんな風になるんだね」

誰かが言いました。

「なんだか作り物みたいだ、リアリティーがない」
リアリティーがないと言われれば目の前のその死
体にはまったくリアリティーがなくて、作り物み
たいで、頭の上のほうに残っている髪の毛も、こ
れは一体何でできてるんだらう、安物のエクステ
の束みたいだ、と思つてみたり、それでもいやい
や、これは髪の毛なんだと頭の中で、否定してみ
たりと・・・もう三年も経つていて、吹
き込んでくる雨と風にさらされているので、あま
り嫌な匂いもすることもなく、むしろ現代美術の

彫刻のように思いました。

少し残った骸骨に髪の毛、浮き上がったアーチと
いうかドームの骨組みのような肋骨。

「いつか私たちもこんな風になるんだね・・・」

「まあ、いつどこでこんな風になるかはわからない
んだけどね」

「わからない」

「わからないよね」

「その時、誰が見つけてくれるんだらう」

「それもわからない・・・」

「うん、わからない」

「わからないよね」

「この人だつて、まさか私たちに見つけられるとは
思つてなかつたよね」

「会つたこともない女子高生だよ、私達」

「何年前に死んだんだらう？」

「三年？・・・五年？」

「もつと前かも」

「私達が・・・高校に入る前からここに居た
のか」

「中学校入試くらいかも」

「その時からこんな感じだつたんだね・・・」

「ずっと、一人で・・・ここに横たわつて」

「割れた窓から吹き込んでくる雨に打たれて」

「でもここは静かで、いいね」

「ああ、それはそうだね」

骸骨の頭部。

目があった場所はくぼみになつていて、もちろん、
もう目はなかつた。

目が無い。

もう見えない。

もうなにも見えない。

最後にこのくぼみにあつたはずの目が見たものは
なんだつたんだらうか？

「ねえ」と、キャサリンが言った。

「私達はいつこの形になるんだらうか？」

「わからない」

「わからないよね」

なんで怒られなきゃなんないんだろう、いつもい
つも・・・
そう思っていました。
ずつとずつと思っていました。
うるせえなあ・・・

「嫌だなあ、これでまた怒られるのかよ」
私達は白い遺体の側に立ち尽くして、そんなこと
をずつと頭の中で繰り返していました。
それは、もしかしたら私だけだったかもしれませ
ん。

いや、でも、そうじゃない、と思います。
そうじゃないという確信があります。

あそこにあの時いた四人はみんな同じ事を思っ
ていたと思います。

「これでまた怒られちゃうなあ、嫌だなあ、なんで
怒るんだろう・・・別にいいじゃんか・・・放っ
といてくれよ」

放っておいてほしい。
(静かに)うるせえ、うるせえ、うるせえ、うる
せえ・・・みんな、うるせえ・・・

目の前には、誰にも見つけられることなく放って
おかれていた白骨がありました。

長い間、放っておかれていた死体がそこにありま
した。

でも、それでも、です。例え、あんた達の言うこ
とを聞かなくて、こんなになつたとしても・・・
・・・それでもいいから、誰も私達を怒らないで
欲しい、と思いました。放っておいて欲しいと思
いました。

どうせみんなこれになるんだから、いいじゃない
か。
細かいこと、言うなよ。と。
最後はこれなんだよ。

どうせこれじゃないか。
これなんだよ、これ。
・・・・・そうだ、あれは誰の言葉だっただろ
う。

「人は一生かかって死体になる」
その通りだ。
どうせこうなるのなら、何をしても良いではない
か。

どうせみんなこんなになるんだ。
白い骨になるんだ。
何をやってもいいはずじゃないか。

私達に、ああしろ、こうしろ、それはダメだっ
て怒るんじゃないねえ、私達の行く手を塞ぐんじゃない
で、どうせ・・・・・こうなるんだから、好きにさ
せろよ。

うるせえんだよ。
私達はその白骨の側に佇んでいたのは本当はそう
長い時間ではなかったかもしれない。

でも、その時間は私達にとってはとても長く、一
瞬だったかもしれないが、めまぐるしく、いろ
んなことを考えました。

すぐに・・・・・考えることに疲れてしまいま
した。
「ふううう・・・・・」

四人はほぼ同時に溜め息をつきました。

考えることに疲れ果てたからです。
それは深い、深い溜め息でした。

そこでようやく私達は死体以外のものに目をやる
余裕ができました。
障子が破れ棧(さん)がずたずたに折られた向こ
うの、窓ガラスは割れていて、ホテルの庭が見え
ました。

そこに真っ赤な曼珠沙華の花が群れて咲いていま
した。
風に揺れて咲いていました。

そうだ。
そうだった。

その時になつて、私達がそもそもなぜこの廃墟の
ホテルにふらりと入ったのか、という目的を思い
出しました。

「あの廃墟のホテルのあそこに咲いている、曼珠沙
華見える？ あれ、綺麗だよ、見に行かない？」
それがそもそも、この廃墟に入った理由でした。

私達はその群れて咲き、風に揺れている真っ赤な
曼珠沙華を見下ろしていました。
そして、再び、そこに立つ仲間達を互いに見まし
た。

それから言葉を交わすこともなく、私達はその曼
珠沙華が咲いている裏庭へと降りて行きました。
誰もなにも言いませんでした。

曼珠沙華を力づくで何本も抜いて、抱きかかえる
ようにして白骨死体のところに戻りました。
摘んできた大量の曼珠沙華を遺体に置いていきま
した。

横たわる白骨は曼珠沙華の赤に覆われていきまし
た。
みんなで手を合わせました。

どこの誰だか、いつ死んだのか？
なぜこうなったのかもわからないけど、とりあえ
ず私たちは曼珠沙華を手向けて、手を合わせたの
でした。

フエリスではキリスト教の教育を受けてきました
が、私達はその時、手を合わせたのでした。
私達もいつかこうなる。

いつかこうなつた時、私達に・・・・・いや、
私には一体誰が曼珠沙華の花を手向けてくれるの
だろうか？

事切れてから曼珠沙華の花を添えられるまで三年
かかるのだろうか？
いや三年ならまだ良い方かもしれない。

五年か・・・・・
十年か・・・・・
そもそも、見つけてもらえるのか？

この形で残るのか？
疑問はいっぱいです。
私はどうしてこの形になるのだろうか？

それは・・・・・原発ですか？
ミサイルですか？
震災ですか？

でも、それがなんであつたとしても、まあいいで
す。
それは仕方がないから諦めましょう。

でも、できたらその時、こんなふう誰かにお花
を添えて欲しいものです。
そう思った時、私は、生まれて初めて・・・それ

まで学校ではさんざん言われているけど、ちつとも信じちゃいなかった神様とかというものに祈りました。
生まれて初めて真剣に祈りました。
どうか私がこうやって亡骸（なきがら）になった時、それが死ぬ時じゃなくてもいい、本当にこんな風に亡骸になつてしばらく経つた時でもいい、そのいつかのその時……どうか、私のそばには、どうか、どうか……私の大好きな人が……祈ります」

二宮「本当に……『スタンド……バイ……ミー』じゃねえかよ」

のの「もうさだね……ほんとうにそうだね」
二宮「……反省文になつてねえよ、書き直しだよ」
のの「……えええ」

二宮「学校はそんなさあ……私達の気持ちなんて求めてないんだからさ」
のの「ま、そうだよ」

二宮「はい、書き直し」
「スタンド……バイ……ミー」が再びカッ
トイン。
暗転。

『焼肉へ行くこう3 警察へ行くこう』初演 二千十八年九月

舞台下手（しもて）前に警察の受付のカウンターがあり、舞台奥から客席にいるであろう婦警さんに向かい机を叩いて抗議している佐瀬ののみ。
困惑している婦警さん。

ののみ「だから！ 私は、あの子の姉です！ どうしたら信用してもらえますか！ もう二年もひとつ屋根の下に暮らしているんですよ！ 私は母の娘ですが妹、想奈多は父の娘で二年前に再婚したんです！ 何度話したらわかるんですか！ そうです！ 再婚したと私は父と母に言われてたんです、ついさつきまでそれを信じていました。知らなかつたんです父と母が籍を入れていなくなつたことを。でもだから何なんですか、私たちももう二年半も一緒に暮らしている家族なんですよ！ そして想奈多は私の妹なんです。これを一体どうやって証明しろと言いますか！ 今、父は海外におり、母も今連絡がつかない状態です、母は病院勤務ですから、確かに休憩時間が来たり、手が空けば留守電やFAXのメッセージに気がつくかもしれない、でもそれまでの間、いや、私はいいいです、でも、私の妹、想奈多はずつとこの警察から出れないと言つてますか？ 彼女は高校二年生なんですよ！ もう取り調べは終わつたんでしょ？ 事情聴取と取り調べの区別が私にはわかりません、じゃあ、じゃあ、じゃあ、いいです、いいですよ、それをじゃあ、取り調べと言わない、取り調べは終わつたんでしょ？ 身元引き受け人が来ない限り、釈放してくれないわけですよ、釈放して言わないのはわかりました、でも解放してはくれないわけでしょう？ 想奈多の担任の先生が来ると言つてもうどのだけの時間が経つんですか？ おそらく担任の先生は引き延ばしにかかつてると思います。こんなところに来て、

騒ぎになりたくないと思つてるに決まつてるじゃないですか。お嬢様学校の先生なんですよ。先生だつてお嬢様みたいな考え方をしてるに決まつてるじゃないですか。警察なんかに来て、一体どこの誰が写メされるか、それがネットに流れるか……それがあいつらが怖いんですよ。私は彼女の姉です。信じてはもらえませんか……どうして信じてはもらえないんですか！」
上手（かみて）の明かりが消え、下手奥に立っている想奈多に明かり。
想奈多が立っているのは廃墟。
ホテル跡。

死体を発見した後。
曼珠沙華に彩られた想奈多。

（以下、想奈多の一人語りで、廃墟で死体を発見した高校生達のやりとりをすべてやる）
想奈多「どうしよう……」

「どうしようか……」

私と明日香は、責任をなすりつけ合うかのように、堂々巡りの「どうしようか？」「どうする？」を繰り返していたが、やがて、キャサリンがはつきりと腹をくくつた口調で言つた「どうするもなにも、しようがないじゃない」
そうだ。

しようがない。

一つだけ本当は選択肢が残されているけれども、その残された一つの選択肢については誰も検討すらしなかつた。

その残された選択肢とはもちろん、見なかつたことにしてその場を立ち去ると言つことだ。

「ごめんね」

とキャサリンが言つた。

「私が、あの曼珠沙華がきれいだから、あそこに見に行こうよと言つたばかりに……」

明日香が言つた。

「曼珠沙華すごいきれいだった」

私も言つた。

「これだけの曼珠沙華、なかなかそう見えるもんじやないよ」

玲奈が言つた。

「一人じゃね、ちよつとこんなところ入れなかつたしさ」
明日香が言つた。

「そうだね」

「そうだね」

「ここに入ったのは良かったんじゃないの？ 入つたところまでは」私のその一言でみんな笑つた。

笑つてくれた。

「さて……」

そして、私はスマホ取り出して、電話をタッチ、キーパッドを表示、そして1と1と0を押した。

電話は一コール半で繋がつた」

下手（しもて）暗転。

上手（かみて）前のののみへ明かり。

警察……受付。

ののみの婦警さんに対しての抗議はまだ続いている。
のの「どうして、どうして信じてくれないんですか？……」

のののみ、独白になる。

のみ「ここは怒るところなのだろうか、私は今の自分の感情が何なのかよくわからなくなってきた。警察の立場に立ってみれば、私がいくら主張したところで、私が本当は何者かわからないのも当然だろう。ここで身内ですと主張してる人がいるからといって、そんなに簡単に違う名字のしかも二十歳そこそこの女に引き渡すものか。」私と想奈多の関係を証明するものなんて何もない。

お嬢様高校に入学すると同時に、引越してきた想奈多。

学校に登録してある前の住所は前の家、父の実家の住所になっていた。

離婚しているとお嬢様高校の入試に不利なのではないかと、いろいろ画策した結果、そうなったというのは、前に聞いた。

だから、私の学生証と照らし合わせても、そもそも想奈多は住んでる場所が違う。

私は入ったばかりのバイト代をコンビニのATMで下ろして、タクシーで駆けつけてはみたものの、結局、ここで何の役にも立ってはいない。

今、想奈多はどんな気持ちでいるのだろう。まあ彼女のことだから、一人で時間を潰す事では無いだろうから、思い悩んだり涙を落としたりしちやいないだろう。

そこだけは少し気が楽だった。

でも、だからといってね私はここで引き下がるわけにはいかなかった。

訴えるしかない。

こういう時は引いちゃダメだ」

そして、再び、のみは目の前の警察の人に向かって、

のみ「信じてください！ どうして信じてもらえないんですか？ どうすれば信じてもらえるんですか？ 私はあの子の姉で、あの子は私の妹なんです！」

のみ、暗転。

想奈多、明転。

ホテル廃墟

白骨の側に立ち尽くしている想奈多達。

想奈多「スマホに向かって信じてもらえないんですか！ どうして？ イタズラじゃありません！ もう一度言います！ 死体を発見しました！ 来てもらえませんか！」

(独白になる)

いたずら電話だと思われた。

でもまあそれはしようがないかもしれない。

しかもできの悪いイタズラ電話だ。

ハナからまともにとりあってもらえなくてもしようがないかもしれない。

(電話口の口調で)学校の帰りにホテルの廃墟の中で死体を見つけました。警察ですか？ 急いで来てください！

(独白)

無理な話だ。
(そして電話の口調に戻り)じゃあ、わかりました、いいですか？ 学校に問い合わせてください。S2Aの金井明日香、松田キャサリン、S2Cの本間玲奈、といったところで、例えば私たちに恨

みを持つているとか、その名前をかたっていたから電話をかけていないという保証は何もない。警察は最初から私の電話を相手にしてないわけではなかった。

不思議なことに、話せば話すほど疑いが深く、対応が冷たくなっていくのがわかった。

その声の感じから、イタ電だと判断されてしまった、ということが伝わってきた。

私たちが動揺してないのがいけなかったのか？ 落ち着き払って淡々と状況を述べているのがいけなかったのか、逆に嘘くさく聞こえたのか？

半泣きしながら、助けを求めるように、許しを乞うかのような声で「来てください！ 怖いです、びつくりしました、助けてください、どうかお願いします！ 早く、早く……」

とでも言えばよかったのか。

死体を見つけたそんな時まで私達はそんなふうに大人に向かって演技をしなければならぬのか。

か弱い女性を。

慌てふためく女性を演じが方が信じてもらえたというのか？

「もういいです」

私は一度電話を切った。

そしてキャサリンたちに言った「冗談だと思われる」

「はあ？」明日香は口を開けたまま止まった。

「どうしてくれようか」玲奈が言った。

とても不思議な気持ちだった。

信じてもらえないなら、このままここを立ち去ってしまうことだってできないわけじゃない。

けれども……私達はこの誰だかわからない会ったこともない死体に大量の曼珠沙華の花を手向けた。

手で合わせた。

それで……「それじゃあ、そのうち、誰かに見つけてもらってください」と、手を振って、その場を立ち去ることが出来るだろうか？

私にはできない。

そんなことはできない。

なぜなのかと聞かれると、その答えはわからない。わからない。

見つけてしまったものを見なかったことにはできない。

私達はこの死体とここで出会ってしまったんだ。出会ってしまったってなんだろう。

「こんにちは、初めまして」「じゃあまた、どこかで」と言いながらも、もう二度と会わない奴なんていくらでもいる。

そんな事は日常だったらいくらでもあることだ。この人に対して、私たちがそれをやっていけないと言ふ事は何もないだろう。それでも私は思う、いや私たちは思う。この気持ちは何なのかしばらくほんとにわからなかった。

でも、その答えは単純なことだった。

いつかどこかで私たちがこんな状態になったときに、花を手向けてくれる、そして手を合わせた女

子高生達が「じゃあ、また、誰かに見つけられる
といいね」と、言い残して、そのままその場を立
ち去れちゃたまんないと思ったからだ。
そんなの嫌だと思っただけから。
嫌だと思っただけから。死体になっ
てしまったらありやしないだろう。
でも、だ。
それでも私達には、そんな未来を思い描く想像力
がある。
想像力はなにも楽しいことばかり思い描くために
あるわけではない。
そんな未来はまっぴらごめん。だからこそ、今、
私達にはやらなければならぬことがある。
「証拠写真を送ろう」私は言った。
「いいね！ その手があつたか」キャサリンが笑っ
て言った。
前歯の真ん中を横に走る矯正中の金属のブリッジ
を見せて笑った。
でも、と、私達はそこでまた一度考えた。
ここで死体の写真だけ送ったとしてもネットに転
がっているそれっぽい JPEG を添付して送ってい
ると勘違いされかねない。
いたずらが余計に悪質ないたずらと思われること
だろう。
私達が死体を発見し、その場にいることを伝える
ために、私達四人は顔を寄せ合い曼珠沙華に覆わ
れている死体と一緒に映った写真を送るしかな
い。
私はスマホを空に掲げ四人がきちんと入る位置を
探った。
私とキャサリンと明日香と玲奈と、死体が・
・
・
「いい？ 撮るよ！」
普段ならみんなが笑顔になるところだ。
さすがに、ここでそれをやると不謹慎である事は
分かっていた。
みんな真顔になったところで、スマホのシャッター
を指で叩き、証拠写真を撮影した。
ネットで所轄の警察のアドレスを調べ、そこに「さ
つき電話した高校生ですが」と画像を添付して送
信した。
さすがにこれで警察はやってくるだろう。
でも、でも、でも、だ、これでまた・
・
・
警察の奴らに信用してもらうために死体と一緒に
写メを撮ったって事で、私達はさらに学校を怒ら
せることになるだろう。
(笑つ)
それじゃあ、お聞きしますけど、いったい私達は
どうすればいいと言うんですかね！
「死体なんかと一緒に写真を撮る人の気持ちがあ
りません」
そう、言われるに違いない。
別に私達だって好き好んで撮ったわけじゃない。
ということがわかってもらえらるだろうか？
信用してもらうために、この方法を取るしかなか
つたんだ。
後になつてみれば、誰もがきつと「そんなことを
しなくても」「他になにが方法があつたんじゃない
の？」と言われるかもしれない。
他に方法？ どんな方法だよ。

けれども、今この死体と一緒に写メを撮る事が最
も早く、最も効率的で、最も高い信憑性がある行
為だと私達は判断した。
とても頭が良い。
「たつた一つの冴えたやり方」ってやつじゃないか。
そこを褒めて欲しいもんだが、きつとそんなこと
を思う奴らなんか誰もいないだろう。
「またこれで怒られちゃうね。絶対怒られるね」キ
ャサリンがそう言った。
だけどね、ここで、この瞬間、私達は守るべき
ものを守り、やるべきことをここでやったのだ。
信じてもらえない、そこで凹んだり泣き寝入りし
たりする場面だったのだ。
どうせならと思つた。
どうせなら・
・
・
どうせなら、お前らが思
つてくるような、世の中のことなど、何にもわかっ
てなくて不謹慎で、バカな女子高生をやつてやる
つかと思つた。
死体と一緒に写真を撮っているのに顔の側でピ
スを作り、頭の横でピスを作り、しかもスノー
で、ほつぺたから三本のヒゲが出て、みんながみ
んな、黒目がちのくりくりとした目で笑っている
写真にしてやるうかとも思つた。
そんなくりくり目の三本ヒゲの私達けものフレ
ンズのその向こうで曼珠沙華に覆われた死体がやつ
ぱりスノーで、三本のヒゲでも生やしている写真
でも送りつけてやるうかと思つた。
そう考えただけでとつても痛快だった。
きつと、不快に思うだろう。
私達のことを嫌いになるだろう。
それでも構いやしないんだよ。
まあ・
・
・
でも・
・
・
まあやらないけどね。
でも、覚えておけ、それをな、私達は・
・
・
やろうと思えばできるんだぜ。
おまえらの顔をしかめさせ、怒らせることなんて
簡単なことなんだ。
いつくからでもできるだよ、本当は・
・
・
でも、やらないけどさ。
「さつき電話した高校生ですが」というタイトルで
写真を添付して警察にメールしたら、私達はやる
ことがなくなつた。
見上げれば夕焼けが、雲を赤く染めていた。
それはとても美しく綺麗で、あーこの雲見たこと
があるなあ、と思つた。
『紅の豚』でポルコ・
・
・
ロツソが飛んでいたよ
うな空だった」
想奈多、暗転。
のみ、明転。
警察・
・
・
受付。
のみと婦警。
のみ「私たちは自分が誰なのか、証明するもの持
っていない。ポイントカードしかない。後はゆ
うちよのカード。学生証。でもそんなものいくら
提示したところで私と妹の関係を証明するものは
何も無い。そもそも、赤の他人だったのだから。
私だつて、びつくりした。
ある時、新しいお父さんに連れられた高校生が目

の前に現れて、どうも妹ですと言った。
そして、ちよっと高めのレストランで食事をした。
その日から妹となった想奈多という女の子はナイフとフォークの使い方がとても自然で、私は正直そこでもうすでに焦った。
フォークの裏の丸いところにご飯を乗つけると面白い位にポロポロ落ちた。
落ちないうちに急いで口に持って行かなきゃと思ったら、前歯にぶつかって力チンと音を立てた。痛かったし、なにより恥ずかしかった。
私の妹、想奈多はそれを見て見ぬふりをしてくれた。
笑わないんだ、良かった、とほっとした記憶がある。
というか、そのフランス料理の店でいろんな話をしたはずなのに、覚えていることと言ったら、そんなことだけだ。
結局、お母さんが「FIRE」を見て警察に電話をしてきて、私は私であることが警察に認められた。
私は精一杯文字通り自分を主張してみた。
しかしそれは届かなかった。
私は認められなかった。
負けた。
何かに．．．．．
そして、ようやく、妹、想奈多と会うことができた。
ののみ、舞台奥へ下がる。
と、上手（かみて）奥でずっと正面を向いていた想奈多が、上手（かみて）を向き、ののみと対面する。
そこは警察の廊下。
ベンチに座って待つのみ。
やがてとあるドアが開いて想奈多が出てくる。
立ち上がるのみ。
その、ののみの前で想奈多、頭を下げた。
想奈多「．．．．．すいませんでした、ののみさん」
ののみ「．．．．．お姉ちゃんと呼びなよ」
想奈多「．．．．．すいません、まだちよっと．．．」
ののみ「そうか」
想奈多「すいません」
ののみ「いいよ、待ってる」
想奈多「すいません」
ののみ「帰ろう、うちへ」
想奈多「はい．．．．．」
ののみ「下手（しもて）に向かって歩き出しながら、ののみ」
ののみ「想奈多ちゃん、おなか、すかない？」
想奈多「すきました」
ののみ「焼肉へ行こう」
想奈多「いいですよ．．．．．お姉ちゃんのおごりですよ」
ののみ、足を止めた。
想奈多、そのまま歩き、ののみを追い越して退場。
その想奈多の背に。
ののみ「今、お姉ちゃんって言った？」
ののみ、後を追って退場。
暗転。

『シヨウほど素敵な商売はない』初演一千九百零五年九月。
『名画座ロマン文化』映画館の客席。
塚本拓弥が足を投げ出して座っている。
やって来る宇佐美雅司。
拓弥の横に座り。
宇佐美「はい」
と、都こんぶを差し出す。
拓弥「なに？」
宇佐美「都こんぶ」
拓弥「え？」
宇佐美「ポップコーンはもうないって」
拓弥「あ、そう」
宇佐美「そう．．．．．売店の棚、がらがら．．．」
拓弥「都こんぶ．．．．．だけ」
そして、宇佐美、あたりを見回し。
宇佐美「俺達だけ？」
拓弥「うん．．．．．」
と、携帯を見て。
宇佐美「あ、もう始まつちゃう時間じゃない」
拓弥「うん．．．．．俺達二人の貸し切り状態かもよ」
宇佐美「うそ．．．．．」
拓弥「ほんとほんと．．．．．」
宇佐美「だって、今日で終わりなんだよ、この映画館．．．．．」
拓弥「知ってるよ、知ってるから来たんじゃない」
宇佐美「関係者とかさ．．．．．来ないの？ 映画館のさ．．．．．最後を見届けに」
拓弥「いないみたいだね、関係者」
宇佐美「関係者いないって事はないでしょう」
拓弥「いや、わかんないけどさ．．．．．とにかく、俺達だけだよ．．．．．」
宇佐美「なんで？」
拓弥「なんでって？ なんで？」
宇佐美「こうさあ．．．．．なんていうか．．．．．昔、みんなここで映画を観たわけじゃない．．．．．ロードショーを観る金なくて、ここで二本立てとか三本立てとかを観たわけでしょう．．．．．その映画館が閉館になる．．．．．最後の日の、最後の上映だよ．．．．．なんかもっとみんなさあ．．．．．想像してたのと、全然違う」
拓弥「え？ なに、なんかそういう事で盛り上がりつつあるところでカンドーとかしたかったの？」
宇佐美「そう．．．．．そうだよ」
拓弥「いや、俺はこんなもんだと思ってたよ」
宇佐美「そつなの？ え？ 映画館の最後の上映をたつた二人の貸し切りで観れると思ってたの？」
拓弥「だってさあ．．．．．みんなもうこういう映画館で映画を観なくてさあ、TSUTAYAでDVD借りてさ、自分の部屋で寝るところがって、5．．．．．1チャンネルで観てるんだもん」
宇佐美「それはそうだけどさ、映画はさあ．．．．．」
拓弥「なに？」
宇佐美「映画なんだからさあ．．．．．映画館で観るべきだよ」
拓弥「映画館で観る意味ってなにがあるの？ こういう椅子にきちんと座って見なきゃなんないしさ

あ……その時間に映画館に行かなきゃならないしさあ、人の携帯は鳴るしさあ、鳴った携帯に出ちゃうしさあ、そのまま口ビーに出るのはいいとしても、話しながら行くからさあ、そっちが気になってしょうがないしさあ……予告編とか観なきゃならないし……サウナ……レインボーとか、くっさい芝居の指輪のCMとかさ……もういいよって思うじゃない

宇佐美「そりやそうだけどさあ……」
拓弥「まあ、予告編はいいよ。予告編までは良しとしよう」
宇佐美「あ！」
拓弥「なに？」
宇佐美「今日、予告編とか、ないんだよ」
拓弥「あ、そうか」
宇佐美「今日で終わりなんだから」
拓弥「いきなり本編が始まるんだ」

宇佐美「やつぱこれはあれなのかな……」
拓弥「なに？」
宇佐美「SARSの影響かな」
拓弥「やつぱり？」
宇佐美「じゃないの？」
拓弥「うそ、もう？」
宇佐美「じゃないかなあ」
拓弥「早いなあ」
宇佐美「遅かれ早かれ、人が集まる所に人が行かなくなると思っただけど……」
拓弥「SARSって……」

宇佐美「うん」
拓弥「生物化学兵器だよ、どう考えても」
宇佐美「そうじゃないの？」
拓弥「バイオ……ハザードだよ」
宇佐美「あつという間に五百人亡くなってると、死亡率十五パーセントだし、十歳以下の子供が死ぬ確立が低いってのもね……」
拓弥「おかしいよね」
宇佐美「なによりもこのスピードがさ、早すぎるよね」

拓弥「よく、香港でインフルエンザが流行って日本に来るじゃない」
宇佐美「うん……」
拓弥「こんなに早くないよね」
宇佐美「勢いにね、ついていけないんだよね」
拓弥「感染の仕方もわからないしねえ」
宇佐美「あれ、知ってる？ 五人からウィルスを検出したんだけど、五人が五人とも違うウィルスに進化してたって」

拓弥「え、それ、知らない、知らない」
宇佐美「だから、仮にワクチンが開発されたとしても、それが効くかどうかは、わかんないんだよね」
拓弥「へえ……そりやとんだ事だなあ」
宇佐美「だいたい、いつワクチンができるんだろう」
拓弥「できたとしても、そのワクチンが必要な場所にあつて、必要な時に使える状態でないとまずいんでしょ？」
宇佐美「そうそう」
拓弥「もう北京の小学生は一ヶ月近く学校に行つてないっつーし」

宇佐美「関西国際空港から出てる北京行きの飛行機は欠航しちゃってるし……中国に留学している学生が強制的に送還されたのって天安門以来じゃない……」

拓弥「日本にいつ入ってくるか？」
宇佐美「もう入ってるかもしれないし」
拓弥「あ、そうか……」
宇佐美「これから映画館で映画観るって、ものすごい勇気がいる事になるかもよ」

拓弥「ああ……ねえ」
宇佐美「北京のさあ」
拓弥「うん……」
宇佐美「映画館にさあ……『ハリ……ポッター』と『ロード……オブ……ザ……リング』のポスターが貼つてあつてさあ」

拓弥「うん……」
宇佐美「扉が封鎖されてるんだよね……」
拓弥「そうか……観たくても、封鎖されちゃうかもしれないんだ」
宇佐美「いろんな映画観たなあ……この映画館で……」

拓弥「カリオストロ』やる度に来てたもん」
宇佐美「エボラとかはまだ対岸の火事だったけど、SARSは此岸（しがん）だからなあ」
拓弥「『カサンドラクロス』だね……」
宇佐美「そうそう『12モンキーズ』」
拓弥「『アウトブレイク』だ」
宇佐美「『復活の日』もそうだよ、観てないけど」

拓弥「ああ……角川映画のね……草刈正雄の……監督、深作さんのやつだ……亡くなっちゃったしなあ、深作さん」
宇佐美「あ、『バトルロワイヤル2』」
拓弥「あれ、夏でしょう」
宇佐美「もう封鎖されてるかなあ……」
拓弥「『マトリックス』はどうよ」

宇佐美「『マトリックス』……リローデッド？ は、いつ？」
拓弥「六月七日公開」
宇佐美「ぎりぎり……」
拓弥「え、ホントに？」
宇佐美「うん……俺の読みね」

拓弥「『ターミネーター3』は？」
宇佐美「あれは……七月の中頃だっけ」
拓弥「そうそう、今度は女のターミネーター」
宇佐美「七月ってさあ……電気もなくなるじゃない」

拓弥「電気？」
宇佐美「うん……原発、今、停まつちゃうてるから、電気がさ、足りなくなってる頃だね」
拓弥「足りなくなると、どうなるの？」
宇佐美「そりやあれだよ、クーラーがまず効かないからね」

拓弥「つらいね、それは」
宇佐美「だつて、信号機の電気が足りるのか、とか、銀行のATMの電力が……とか言われてるんだからさ、劇場のエアコンなんて……一番最後でしょう」

拓弥「まあねえ……なきゃ、なくても死なないものだからねえ」

宇佐美「『チャールリーズ』……『エンジェル』も劇場で観たかったなあ」

拓弥「え？　え？　……ホントにそうかな、ホントにダメなの？」

宇佐美「俺だつて、なにか安心できるさあ……希望があれば、すぐりたいよ。だつて、劇場で『チャールリーズ』……『エンジェル』……『フルスロツトル』観たいもん、あの三人が今度はどんなバカやるのか観たいもん」

拓弥「ああ……そう……もう、そうなんだ」

宇佐美「いっぱい観たよ、この映画館で……いつも一生懸命観てたよ……でも、こんなになつちやつた今にして思うと、もつともつと一生懸命観ておけばよかったと思うよ……悔いはないけど……残念でしょうがないよ……」

拓弥「そうだね……」

そして、ベルが鳴る。

拓弥「あ、始まる、始まる……」

場内が暗くなり……

拓弥「こうして、席に着き、場内が暗くなり、目の前でなにかが始まる。

映画館や劇場で毎回わうこのときめき。

今日はなにを見せてくれるのだろう。

今日はどこへ連れていってくれるのだろう。

今日、僕は泣くのだろうか、笑うのだろうか、どんな驚きがそこに待っているのか。

パンとワインにありつけたら、人は次にサーカスを求める。

パンはある、ワインもある。

けれども、サーカスがなくなってしまう。

劇場が封鎖されてしまうなんて夢にも思わなかった。

今年の夏。

たぶん暑いんだろう。

でも、僕はきつと、その中で凍えていると思う。

震えていると思う。

サーカスに飢えて……

サーカスに飢えて……

暗転。」